

「えッ。」

「安い物ぢや。千兩で俵の命が買えるならこんな安い物は有りやせん。どふぞ早ふ是を持って行て買ふて来て下され。」

目の前へ千兩箱をドンと投り出されて

「うわーア。」ベタ／＼／＼。

番頭さん、可哀想にこれで三遍腰を抜かしました、漸く天満へ行て蜜柑を買ふて参りまして

「へエ親旦那様、此品で御座ります。」

「オ、／＼。美事な蜜柑ぢや。定めし俵が喜びますぢやろ。さ、一時も早ふ持て行て喰べさして遣て下され。」

「承知を致しました、御免を……………へエ若旦那……………大きにお待ち遠様で御座りました、さア御望みの蜜柑を持て参りました、どふぞお召し喰りを……………」

「あッ。ほんに蜜柑ッ。あー嬉しい。……………併し番頭。此時候外れに定めし辛苦して搜して呉れたんやろ、決して粗略には思やへんで。」

「もし何を仰有る。奉公人が御主人の爲に盡すのは當然でムりますがナ。それよりも親御さんの御慈悲を御喜びなはれや。其蜜柑一つ何ばやとお思ひ遊ばす、千兩でごわつせ。私しは値を聞た時腰抜

かしましたがナ。處が平常あの通り吝い……………いやアノ、險約人の親旦那が、高いとも云わずに千兩箱を投り出してムりました。親なればこそで御座りますがナ。」

「あ、結構な事や。お父つあんなりお母はんが、大枚のお金を出して買ふて呉れはつた蜜柑、有難ふ頂戴するワ……………」

「それが宜しふみます、剝いてお上げ申しまひよう。ア、勿態ない物やなア。これが千兩……………皮丈けでも五兩位の價値が有るやろナ……………袋が一イニウ三イ四オ五イ六ウ七ア八ア九オ十ヲ……………十袋おまつせ、一袋が百兩や。筋かて一朱位にはなるやろ。」

「お父ツあん。お母はん、頂戴いたします。番頭よばれるワ……………ア、美味しい。ア、美味しい……………あッ百兩。……………あッ二百兩。……………あッ三百。四百。五百。……………ウワー恐ろしい。」

「あ、美味しかった。豪い物やなア、蜜柑を喰べたなアと思ふたら。急に頭がスツツとして身體に元氣がついて來た。處で番頭、今七袋よばれて茲に三袋残したア。私いの病氣はモウ癒る事疑ひなしや。これと云ふのも兩親なりお前のお蔭、そこでせめて此一袋をお父ツあんに此一袋をお母はんに残りの一袋をお前に喰べて貰ひ度い……………」

「あ、左様で御座りますか、お優しいお心遣ひ。有難ふ存じます。早速親旦那の處へ持て参ります。」  
三袋の蜜柑を掌に乗せて部屋の外へ出ましたが